

令和2年度第2回川崎市農業振興計画推進委員会議事録（摘録）

- 1 開催日時 令和3年2月8日（月）15時00分～17時00分
- 2 開催場所 川崎市都市農業振興センター（高津区梶ヶ谷2-1-7）3階会議室
- 3 出席者
出席委員（15名）
竹本委員、徳田委員、梶委員、越畑委員、長谷川委員、土志田委員、新堀委員、岩井委員、石井委員、大西委員、遠藤委員、鈴木委員、堀委員、秋元委員、米津委員

事務局（6名）
都市農業振興センター所長（齋藤）、
農業振興課長（太田）、農地課長（久延）、農業技術支援センター所長（井上）、
農業振興課農政係長（田中）、農業振興課農政係（上仲）
- 4 議題（公開）
 - （1）開会
 - （2）令和2年度及びこれまでの実績
 - （3）令和3年度の主な農政事業
 - （4）2020年農林業センサスの概数値
 - （5）川崎市農業振興計画の改訂について
 - （6）川崎市農業振興計画推進委員会 審査部会について
- 5 傍聴者
4名
- 6 会議の内容（摘録）
『1 開会』
 - （1）開会（田中農業振興課農政係長）
令和2年度第2回川崎市農業振興計画推進委員会の開会を宣言
 - （2）開会挨拶（齋藤都市農業振興センター所長）
 - （3）配布資料確認、委員会目的及び会議公開の確認（田中農業振興課農政係長）
 - （4）傍聴者の遵守事項の説明（田中農業振興課農政係長）

【竹本会長】

2月上旬は入学試験の時期で、明治大学農学部では3,700人程の方に受験していただく予定である。農学部だけでこれだけの方に興味を持っていただいているので、本学がある川崎市の農業がより発展に繋がるよう、委員会を通じて議論していきたいと思う。

まず先日、かわさき都市農業活性化連携フォーラム（以下、フォーラムという）が開催され、この委員の方にも何人か出席いただいた。出席者を代表して、徳田先生に感想をいただきたい。

【徳田委員】

今回規模を縮小して実施したが、若手の方が多くお見えになって、ワークショップも活気があり、インパクトのあるフォーラムになった。

フォーラムの後にも、ゲストスピーカーであった(株)農天氣の小野氏と話をしたが、ポイントとして、国立市は市街化区域で住宅が近くに建つかもかもしれないという、農業経営のハードルが高いなか、農業生産という枠を超えて、コミュニティの核になるという狙いをもって色々な取組に繋げていた。

農業資源はもっと再評価、再定義できると感じた。若い方にとっても社会モデルとして一つのヒントになると感じた。農業とコミュニティの可能性も感じる事ができる先進的な取組であった。小野氏の書籍「東京農業クリエイターズ」を拝読しているが、そこでも様々な事例が紹介されており、参考になっている。

フォーラムのワークショップは、様々な業種の方を核に、ネットワークを広げていくことが大切であるので、こうした機運を作っていたことを評価したい。

国立市では、一橋大学の学生が小野氏とゲストハウスを運営しているなど、学生とも連携されているので、川崎市でも引き続き、明治大学や専修大学としっかり連携していくことが望ましい。小野氏は、色々なヒントをお持ちだったので、皆様にとっても参考になると思う。

別件となるが、2017年のフォーラムに登壇したベーグルカンパニーの茶野さんと意見交換をする機会があった。地産地消を積極的に実践して商品力が高く、市外にも評判が及ぶようになっていると伺った。地産地消の核として今後も頑張っていただきたい。フォーラムを契機にこうしたネットワークが広がっていくことは大変嬉しいことなので、私自身も引き続き、後押しをしていきたい。

『2 令和2年度及びこれまでの実績』

【竹本会長】

議題にある「令和2年度及びこれまでの実績」について事務局から説明願いたい。

【事務局：太田課長（久延課長、井上所長）】

資料2 目標達成状況【戦略1～4】、資料3 農業担い手経営高度化支援事業補助金の活用実績、資料4 農商工等連携推進事業の実績を基に説明。

【竹本会長】

何か意見や質問があれば発言いただきたい。

【岩井委員】

5 ページの目標 1、これまでの主な実績に「連携部会」を開催されたと記載されている。農業・工業・不動産などの部会は興味深いテーマだが、具体的にどんな内容が話されたのか。

【事務局：田中係長】

10 ページ中段にある部分に、過去の連携部会一覧を記載している。平成 29 年度は農業と工業、農業と商業で部会を開催、平成 30 年は、アイデア検討報告会や、農業と不動産との部会を開催した。このような部会を通して、農業者の野菜を他業種が扱うといった繋がり、接点ができている。現在も農産物を活用した新しい展開に繋がっている。

【岩井委員】

農業と不動産との部会では、課題などを含め、どのような話題であったか。

【事務局：上仲職員】

不動産部会は、地元の不動産オーナーさんにお集まりいただいた。例えば、マンションであっても農地が付いているマンションであれば、農業を含めて不動産価値を高めること・認識に繋がるのではないかとといったアドバイスをいただいた。

そのまま何か新しい取組に繋がったわけではないが、不動産の視点から見ても農地には価値あるものだという意見が交わされたのは、実りのある会であったと認識している。

【岩井委員】

市外の事例ではあるが、不動産業を営む方が農業法人を作られて、有機栽培やセンサーを活用した商品価値の高い野菜を生産している。そのような観点のお話もあったのかと思ってお伺いした。

【竹本会長】

まだ岩井委員が言われるような展開は見られていないと思うが、梶委員は今のお話について御意見はあるか。

【梶委員】

家主さんが自身のマンション前に直売所を設置して、自ら栽培した野菜を販売しているケースはある。評判も良いようなので、そういったマッチングはあっていいと思う。

【石井委員】

色々な課題はあると認識しているが、5 ページにある農商工連携について、農福連携についても農商工に入れていただけると嬉しい。具体の記載はないが、検討していただきたい。

【事務局：田中】

事業の正式名称としては、「農商工等連携推進事業」である。福祉はもちろん含めており、IT をはじめ色々な分野を含めている。

福祉との連携で申し上げますと、例えば昨年度、市内農業者と福祉事業者が連携してトマトソースを開発した。トマトソース以外にもジャムなど、現在も農福連携によって商品開発を行っている。また、福祉法人の方が農園を管理して地元で活性化に取り組んでいる、福祉交流農園も開設している。引き続き、連携を進めていきたいと考えている。

【竹本】

10 ページにある、モデル事業でも実施されているが、福祉という言葉が資料に出てこないの、形で見えるよう御対応いただきたい。

【堀委員】

6 ページ下段にある、子供向け農業振興計画の作成と活用について、「まちのはたけとなかよくなるう」など市主催イベントで配布していくとあるが、市民レベルでもイベントなどで活用できればいいと思う。

もっと市民レベルの活動で、こうした資料が活用できれば、かわさきそだちの認知度が上がっていくと思う。今年度モデル事業にある、管理栄養士が作るレシピは、印刷して配れるのが良いと思う。令和3年度以降もぜひ検討いただきたい。

【事務局：田中係長】

パンフレット、冊子の発行部数が足りていない点はあるが、貴重な御意見であるので、参考にさせていただきたい。

【遠藤委員】

6 ページにある市民農園について伺いたい。都市農業を活性化しようというときに、市民農園が増えているということは、農業をやめたことに繋がるのではないか。色々な手を打っていくなかで、農業が続けられないときに市民農園へ転換することについて、どのように捉えるか意見を伺いたい。

【事務局：久延課長】

農地の保全の観点から一定の効果があると認識している。農業の担い手は高齢者が多いため、継続が難しくなったとき、例えばマンションにしてしまうのか、市民農園にするのかといった選択肢のなか、市民農園であれば農地として維持ができる。さらに御子息など、後継者が戻ってきたときに農業を始められる選択肢が残るという意味では価値があると考えている。

【遠藤委員】

市民農園以外については、何か選択肢はあるのか。

【梶委員】

市民農園は農地保全の意義はあると考えるが、他にも利用権の設定を含めてマッチングなどを進める必要もある。また、セレサ川崎でも推奨しているが、農業者の方が講師となって指導していただく体験型農園という形もあり、この手法ではより農地保全に繋がると考える。

市民農園は区画がそのまま貸与されるので、自由な栽培になってしまい、周辺の農地へ弊害が出ることもある。市民農園だけでない他の手法も必要だと思っている。

【越畑委員】

農業ができなくなって、市民農園になることは仕方ない部分はあるが、農業振興地域のなかで後継者がいないとき、家庭菜園のようになってしまうのは困る一面がある。

そのあたりについて、市とも協議したいが、市内農業者の人数は 150 万人いるなかでも僅かであるので、少ないなかで、どうやって進めていくかの姿勢は大切だと思う。

明日、市と農地貸借に関して協議する予定であるが、農業者として息子などに後を継ぐ魅力をいかに伝えていけるかが課題だと思っている。畑を維持していくのは大変なことである。

また質問となるが、4 ページにある援農ボランティア延べ活動日数の増加について、日数にみのり塾は算入されているか。他にも講座があるようだが、どんな様子であるか。

【事務局：井上所長】

かわさきそだち栽培支援講座は、2年で卒業できるよう養成している。野菜や果樹について必要となる様々な作業を体験できるプログラムになっている。

現在、農業者の方から時期や人数、作業内容の要望をいただき、ボランティアを募って派遣する形をとっている。

【越畑委員】

農（みのり）の協力会の活動日数は算入されているか。

【事務局：井上所長】

800日（見込値）のなかに、農（みのり）の協力会は入っていない。

【越畑委員】

農（みのり）の協力会には、年間100日くらい来ていただいているが、みのり塾で麻生区黒川において、援農ボランティアを育成しても、講習の修了後、実際にボランティアに来られることは少ない。

【竹本会長】

モデル事業のマッチングシステムの仕組づくりが止まってしまっているが、市民からすると、もっと参加したいというニーズがあるかもしれない。

その辺りのニーズを拾い上げて、援農ボランティアの育成講座から繋げていくことが重要なので、引き続き検討が必要である。

【長谷川委員】

農業振興地域は後継者がいない。農業者のなかにもアパート経営が多く、空室も出てきている。その空室をどうやって埋めていこうかと思ったとき、隣の農地が遊休地となっているところもある。そのあたりとコラボレーションできれば、テレワークなど在宅の需要もあるのだから、フィットすれば面白いことができるのではないか。

この1年で世の中がさらに複雑になったが、毎日畑に出て綺麗な空気を吸っていると、お金に換えられない環境を独り占めしていると感じる。

これを他の皆さんと分かち合えたら幸せだと思う。新型コロナウイルス感染症の収束までまだ心配事は多いけれど、お互いに助け合わなければならないと思う。今日の話も持ち帰って地元の人たちと話したいと思う。

資料5ページの目標にあるように、新たな農業価値を創造していかないといけないと思う。色々な農業者がいるなか、遊休地にするのはもったいないと思うので、ヒアリングやアンケートなどをもって、有効な方策を作り上げていくのが我々を含めこの委員会が心がけるべきことだと思う。

【竹本会長】

こういう状況の中で、かなり世の中が変わっている。新たなニーズが生まれてきているので、農業者の皆さんが持っている資源をうまく活用していけるのではないかと思う。今後の方向性としても記載していくべきかと思う。土志田委員からも御意見をいただきたい。

【土志田委員】

農業においてはやはり後継者が少ない。のらぼう菜、かぼちゃ、香辛子などやらせてもらっているが、農業を担ってくれる方がいれば、もっと色々なことができると思う。そのきつ

かけとして農業を体験などしてもらうことは大事だと思う。

早野地区は田んぼが多いので、小学生が体験してくれているが、とても良い経験になっているようで、普段からお米の話をしてくれるようになって、私自身も楽しみになっている。

ただ、将来にどう繋げていくかが課題で、農業を継続していくには厳しい環境である。

個人の方ではどうにもならないので、市でも考えていただきたい。農地は維持したいが80歳になって跡取りもいないので、農業後継者は欲しいが、忙しい方々にはなかなか難しい状況である。

また、早野ではひまわり畑を作っているが、たくさん人が来てしまうのは歓迎されないという一面もある。そして畑作業はまだしも、田んぼは経験がないとできないので難しい。

機械も必要なので、これからどうしていけばいいのかというのが正直な悩みである。

【竹本会長】

土志田委員の御意見は、日本の農業の縮図だと思う。皆が考えなければならないことである。もっと意見をいただきたいが、時間の関係上、次の議題に移りたい。

『3 令和3年度の主な農政事業』及び『5 川崎市農業振興計画の改訂について』

【竹本会長】

議題にある「令和3年度の主な農政事業」について事務局から説明願いたい。

【事務局：太田課長、久延課長、井上所長】

資料5 令和3年度の主な農政事業を基に説明。

【竹本会長】

意見を伺いたい、時間の関係もあるため、先に資料7「川崎市農業振興計画の改訂について」の説明を先にお願したい。

【事務局：太田課長】

資料7 川崎市農業振興計画 改訂版概要を基に説明。

【竹本会長】

資料5と資料7について、説明をいただいた。令和3年度の事業が、川崎市農業振興計画の改訂にも関連してくると考えているが、意見をいただきたい。

【新堀委員】

かわさきそだちについて、私が武蔵小杉のグランツリーに出荷する際は、菜果ちゃんのシールを貼ってPRしている。

また、先日の香辛子レシピコンテストはエントリーしたが残念ながら落選した。味としては食べにくい、含まれている成分に魅力があると思うので、健康面を前に出したPRにすれば良いのではないかと。リピートしづらい風味なので、脂肪燃焼や美容効果の視点からアプローチした方がより流通すると思う。

【大西委員】

知財に関する打合せで香辛子の話題が出ていた。川崎市から生まれたものが、全国で使われ始めていると聞いて嬉しく思っている。今後の発展を期待したい。

資料5の12ページについて伺いたい。農商工等連携推進事業で、令和3年度の事業概要にセミナー等の交流会とあるが、令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、

オンラインイベントが主流になった。ただ、農業の分野としてはリアル開催が重要だと思う。

そのため、今年度はどのような形でフォーラムを開催したのか。また令和3年度に記載のあるIT活用による農業経営課題の解決とは、セミナー自体にITを活用するという意味なのか、農業の経営課題そのものをITで解決するという意味なのか、意味合いを教えてください。

【事務局：田中係長】

フォーラムは参加者同士の交流を促進することが本来の意義であることを考え、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の対策をしたうえで、100人規模から縮小し、農業者を対象としてリアルな場での開催とし、モデル事業者など関係者をお呼びして、全体で33名であった。

12ページの内容は、あくまで例示として記載しているものである。ただ、色々な捉え方があり、栽培技術に用いるIT、販売戦略に用いるIT、農業経営に役立つITなど様々な形を想定している。セミナー自体もリアル開催やオンライン開催など、実施方法も検討していきたいと考えている。

【大西委員】

いきなりオンラインセミナーだと、ハードルが高いので、オンラインの勉強会などやってもいいと思う。

【竹本会長】

関連した質問であるが、先日のフォーラムは動画などで公開するのか。

【事務局：田中係長】

フォーラムについては、ゲストトークとモデル事業の発表を動画で配信する予定であり、現在準備中である。

【鈴木委員】

早野地区をはじめとする後継者不足や土地の活用に対する課題、市民農園の在り方など伺ったなかで、それぞれの課題はそのとおりだと思う。

例えば、米の生産が多い県だと、作る人・食べる人が近いこともあって、学校給食がきっかけで、保護者がグループを作って食農教育を行っていたりするが、工業地帯であって違う形で発展してきた神奈川県は、米所ではないので、実際に行動へ移すことが難しいと感じる。

農業をどう守っていくかという点では、小学校などで地元野菜を使って自校給食を提供している取組を見ていると、課題解決への難易度は高いが、まずこうした教育に力を入れるべきであると考えます。

給食や教育で農業の大切さを学び、自分たちの暮らしているまちの農業はどうなっているのかを知って興味を持つこと。今作ってもらっている野菜を育てている畑が、明日にはマンションになっているかもしれないという現実が迫っているという危機感を感じて初めて、自分事として関わってくれるようになると思う。

70～80代で一生懸命作ってくださっている農業者の方に対して、援農ボランティアで、「楽しかった、良かった」といったイベントに参加してもらうのではなく、「この先もう食べられないかもしれない」という視点のフィードバックがあれば、子どもと繋がっている親が必要を感じてもらえるのではないかと思う。

【竹本会長】

フォーラムは、どちらかというと事業者間で実施しているので、もう少し広く、外に向けた視点が必要になると思う。来年度の農業振興計画の改訂へ具体的な反映はできないかもしれないが、この先大切な視点である。

【秋元委員】

現在、大学院修士課程でもうすぐ卒業を予定している。先日、フォーラムに母も連れて一緒に参加した。母も農業者でありながら、こうした場に参加することに対して緊張していたが、参加してみて、非常に良かったと話していた。多様な主体との連携とあるので、一部の事業者だけで集まるのではなく、一般の消費者の方も参画することで、まちとしての課題解決や、盛り上がりを見せていくと思う。

また、特定生産緑地の指定について、対象が約900世帯あるなか、受付が6割にしか満たないのは問題であると感じる。

2020年農林業センサスでは、市内の経営耕地面積のうち約30%が30～50aとなっており、大学院修士課程の研究のなかで、この面積における課税額を分析すると、記憶の範囲であるが、およそ300万円になる。さらに農産物販売金額については、100万円～300万円が27.3%、100万円未満は39.3%となっている。このように市街化区域内農地における農業経営では、課税によって売上が残らないという問題もあるので、都市のなかに農地をしっかりと残そうという動きを作っていないといけないと感じている。

さらに、かわさきそだちの認知度が低いことは危機的な状況だと思う。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、アルバイトができなくなったり、仕事を探していたりする学生もいると思うので、就農などをはじめ農業に関わる機会を増やしていく動きができれば良いと思う。

【米津委員】

質問させていただきたい。かわさきそだち栽培支援講座について、援農ボランティアを育成しても定着しない理由として、マッチングが上手くいかないのか、それとも講座の参加者側が、栽培技術習得のための参加で、その後のボランティアに参加する意向がないのか。その辺りの要因はどのようなことが考えられるか。

また、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、直売所はどこも賑わっていると伺っているが、援農ボランティアや市民農園など、市民の方の農業参加について、新型コロナウイルス感染症の影響はどの程度出ているか伺いたい。

【事務局：井上所長】

まず、かわさきそだち栽培支援講座については、援農ボランティアへの参加が条件となっているが講座を修了した後、実際に参加してくれる方が少ないというのが現状である。

ボランティア側が希望する作業依頼がないなど、マッチングに課題がある可能性も考えられるが、詳細な原因は分かっていない。

修了者も増えてきているので、改めて行政として援農ボランティア活動の後押しをしていきたい。

【事務局：太田課長】

市民農園については、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う制限などは特に設けていな

い。収穫体験であるファーマーズクラブは例年2回開催しているが、令和2年度、春は中止となり、秋の1回だけの開催となった。福祉交流農園でも年2回の収穫体験を予定していたが、実施体制を整えることが困難であったため、今年度は中止になった。

【堀委員】

農業体験は密にならないが、20組を10組に減らして企画すると、90組が応募されて今年度は倍率が非常に高くなった。どこに行けばよいか迷っている家族連れが、農体験や自然体験を求めていると感じる。

【米津委員】

援農ボランティアの件であるが、神奈川県では「かながわ農業アカデミー」で、農業分野以外から新規参入を希望する人を支援している。農業をやりたいが実際に農業ができるのかどうかの判断や、一歩踏み出すことができないという方も多い。そのため、お試し体験として3日間3,000円程で農業体験を実施しているが、その経験を通して、次のステップに進めるかどうか判断することができる。

経営者としては無理であっても、援農ボランティアであればやってみようかなという受講者がいるかもしれない。そこに川崎市の方もいらっしゃるので、かながわ農業アカデミーと連携することで、援農ボランティアとしてのマッチングに繋がるかもしれない。

【竹本会長】

たくさんの貴重な意見を頂戴した。徳田先生から、全体を通して御意見をいただきたい。

【徳田委員】

今回話題にあった、農業への市民参加、市民農園、援農ボランティアなど、様々な動きの歯車を繋げて、川崎市というコミュニティのなかで、農業の存在感を高めていくことが大切で、この歯車の繋がりが後継者不足という課題解決にも繋がってくるのではないかと。

そのうえで、それぞれの事業を機能させていくことが必要である。今回出された課題をはじめ、これまでの農商工等連携推進事業で蓄積された知見や事例なども、農業振興計画の改訂にあたって、考慮いただきたい。

【竹本会長】

農業振興計画の改訂版にはQRコードでリンクを張るなど、本編を充実させるというよりも、そこから様々な情報にアクセスできるような工夫をいただきたいと思う。

『4 2020年農林業センサスの概数値』

【竹本会長】

資料6 2020年農林業センサスの概況についてを基に説明。

時間が過ぎてしまったため、本来、事務局から説明いただく議題にある「2020年農林業センサスの概数値」についてであるが、数値から見ると農地の減少率が小さくなっている。

そして経営耕地面積の割合はさほど変わらないが、農産物販売金額では、金額の大きい経営体の割合が増えている。これは良い傾向でもあるといえるので、今後注目していきたい。

なお、明治大学で卒業論文を提出した学生のなかで2名が都市農業をテーマにしていた。1人は小松菜を栽培している船橋市の都市農家の事例、1人は、朝霞市で行われている市民農園や体験農園の事例を取り扱っていた。都市農業といっても、農業として自ら経営してい

くこと、農地を次の世代に引き継いでいくために市民農園や体験型農園として使っていくこと、正反対ともいえる広い視点がある。川崎市のなかでもその両面があるので、そのなかで市民がどのように関わっていくか、それを考えるために、今後も議論を重ねていきたい。

『6 川崎市農業振興計画推進委員会 審査部会について』

【竹本会長】

議題にある「川崎市農業振興計画推進委員会 審査部会について」の説明を事務局から願いたい。

【事務局：太田課長】

資料1ほかを基に説明。

令和3年第1回市川崎市議会定例会における、本事業実施に係る予算の議決を要することを条件として、審査部会における現在の委員を、令和4年3月31日まで継続することを提案。

【竹本会長】

意見や質問があれば発言願いたい。

【徳田委員】

1年間の任期継続のなかで、審査部会は重要な位置づけであるため、審査実績のある委員の方に継続していただくことが望ましい。

【竹本会長】

徳田先生から委員継続の御意見をいただいたが、他に御意見のある方はいるか。

(意見なし)

【竹本会長】

徳田先生からいただいた御意見や、特段の反対意見がないことから、事務局案を採用する。ほか事務局として連絡事項はあるか

【事務局】

令和3年度第1回の委員会は、令和3年7月を予定している。

『閉会』

【竹本会長】

議題は以上、閉会とする。

以上